

442
三
13

雪の出お路

と



平鹿郡

三卷



鷺岡邑

大木林邑

○ さねりえり

大木林

○ しろくき

猿田

○ きくろ清水

上溝

○ あし新瀬波

二井山

昭和貳年六月廿日

秋田県立
博物館
種子分館

6681
442
11

○ 大木林邑

里長 太兵衛

○ 郡邑記 家負百六十四軒古来大山の林作天森
邑といふ小野古輝道の故城有しと云廢長年中 羽
林左中將公御遷封、時最上伊良子將監番城之
鹿子畑玄番諸取之と云来支城破却、時、廢スル也上溝
村、當村先立之支所故田畠百姓入會長堀ありと見
え管生田四軒寺内三軒牛、沢四軒本所六所 北村四軒高と見えたり
○ 管生田大木林の十丁雪存、寺内村大木林の雪、西上溝、地
存、牛箇河村大木林、一里斗、西南、方、雪存、此牛、
河、和草、佳品、る氣味、り、と、り、大木林、八沢木
村の支所、と

○ 古蹟古石

ツギカハナ
○釵箇峰 十日町村の地を存す釵箇峰と云ふ村あり今と十
日町より属す山嶺いふ山を北下り流は大有井堰ありこゝに
五ヶ村の田地より水任をゆて五ヶ村堰とてつゝおのあたりハ
當いとも多く電ハ大形よりなるおふ牢垣ありのこゝ
大練毬とてはあつて水も流る是を信火合戦と
いふなり。戦よりち負けたる軍士人の亡きものあり存
し世のききあひせりよりうづはる大森の役とて
國の人々知れど今とむりといふこゝより電ハ之し
からるゝかからふ
○井戸が澤 釵箇峰の古城山よりより寒泉を西
南の方より涌出するく小野 寸孫五郎康道
の要水とつり

此山は西門よりしてありあり西角より作るこゝに古城
の庭とおぼくして泉ありさよ残りおのづからさるる山す
かたするよりしるげよりむりをも偶ふ此山よりいさる木を
ルあつて東は塩湯産り御神、鎮座御多氣山雪
羽字志別、御神、鎮座保呂羽山あり同ハはわ山
ちる摩利支天山あり猿甲山の鉢飯杜八井より鉢山四方ハ
かのあがのさちより晴して大森の御と目を伏せたり
に家のひらりとあひて眼より見えたり
役人館より役人橋あり作れりその官舎ありてその人々
住むたふく是よりさるより山の上より木をすまひたり
女礫より処あり城せあの時や城の女ども集りてかゝて
要えし常子拾ひ集めおきたるを定りよめ方むりてあ

おて打やうし処といふことと鞍夷人の婦人今んことあれば

せうといふ

○湯野河とふふありそふありいふふ温泉あり

いふ今いふ冷ういふ水のこしこを汲んで湧く湯

として浴する人ありといふ

○大納言川此河は猿田の鉢井山の志なりやう水上村六並

おふふ交の水もなて上溝おこふてびつちや川とありて五

村の堰は入る是は大納言のありといふ大河ありといふ

いづれの御代の事ありけむ御勅使といふいふ流離の

君といふいふ保羽呂即獄へ奉幣使の卿といふ大納言果

卿此地を席駕といふゆゑあり洪水の出てかい渡り舟は

波もうちやめて舟舟とらふてすくふといふいふ

大納言卿は此川水も流れて死給いといふ古人の語りつ

たといふ此川もいふ旅人たまたまいづるいふいふのお流れ

たといふいふたて委曲といふ詠知りといふいふいふ

大納言のいふいふ今大納言といふいふいふいふいふ

いふいふいふいふ仙北舊記目録村山郡金井

見たりいふいふいふ川を羽長坊の蹄渚川といふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

○鷺ヶ原白鷺朱鷺あふりて群れをみたりいふ

といふ古城の東の麓に在る也

解平かいはらより柏かしわ臺たいより作つくれりといふも柏木かしわぎのいやしむ

りといふゆゑあらういふも其あたりにてそのちまたの古跡

古城の西南に在り

○文田山ふみだやまより梵天山ぼんてんざんといふところあり大納言川おのごんがわの

向大木村の西北よりありそと門傳かどつたてといふ僧の行ゆきい

まふといふてもそのあたりにて山といふも八次木

の山の字もあらうと読めり

○喜多川きたがわは大木村より本陣ほんじんより渡り天下橋てんかきりの下流したの

小川に北水元きたみづもとに上溝村かみづのむらの強清水つよしみづより出て武道村ぶどうのむら

へ入りそより二井山ふたゐりやまの水みづはより七郎しちらうといふ所よりその流

より上溝かみづより此大木村のより天下橋てんかきりの下より直ただに下くだる

川に入るあり此天下橋より北元きたもとのより由理ゆりと平鹿ひらかの

郡界論の時大江おほえの人多く来りてそのと記しるす

作り替ふれしよりあらういふも一橋いちばしのより市巡見いちめぐみ便

の君きみ給たまひし水を天下清水てんかしみづとて処ところにあらうと

○古城の東の山を釵かんざし花山はなやまといふことありあるよしなり

名なあるといふも古ふる釵かんざし花山はなやまといふを山やまを鼻はなといふ其の

鼻はなを花はなより作りあらうといふもつたあらう字かた音おとあぞ

あり此山より水みづなりあるその水みづのゆるよりいふ

○釵花山かんざしはなやま八幡宮やわたみや此市このまちに在り此つらぎに其の跡あとあり

奉ほう奉ほうしし七十三代しちじゅうさんだいの御世みよ堀河ほりがわ院いん寛治かんぢの年とし壬申みづのえの

一いつとつり春日かすかひ四月しがつ朔しつ日にち八月はちがつ十五日じふごにち其世そのよ小野寺おののてら孫まご五

郎康道らうかうだうの氏神うぢがみとて城中じやうちゆう斎祀さいしり今いまハ東ひがし殿どの佐竹さたけ城じやう

守りの鎮守の御神とて神田五斛と元和四年戊午の
秋より寄附給ふものと云ひ

○釵花山下居社祭日五月五日六月二十日とて鹿島明神
ありて長曆二年戊寅のとしに祀奉りていとも古きみやら
ありて行宮頓宮のごと下居の社とあをし奉るいらゝと云
事ありやとて地まの御神とていとも座におもあをし奉る
岬の鹿島ノ御神を遷して祀るやとていとも節靈の神釵
とていとも斎奉るやとていとも山を釵が波奈とていとも山
の豊布津神を祭り奉るやとて神社考詳節九
云鹿島日本記に伊井諾尊斬火神軒遇突智其釵
鐔無血為神號曰薨速日神是武薨薨之祖也
常陸國鹿島明神是之神皇正統記神武天皇東征時夢天照太神召

武薨薨神曰葦原中洲有騷音汝宜行平之答曰我昔
平國之釵下之乃自平矣於是紀伊國石草村高倉下年奉此
釵天皇大悅士卒皆起軍大進誅長髓彦其釵号豊布津神
在大和石上後納常陸鹿島神宮今案豊布津者神武
見えたりいづこも地動を恐怖て此御神を奉るをい
る事なり此とて斎の奉るにあは釵のありとていとも

○水神社こと雄鹿浦新山より遷し奉りし御神と本三
河後ともあをし奉るやとていとも三河尻とて御膳の上
川大納言の志ら此三河の落會ある三河後の石あり此水
神大汝命とて御神とていとも今鹿島ノ御神の會殿を斎奉り
○釵花山八幡宮本社向東方洪鐘銘大旦那佐竹義
秀公寛延二己巳三月十五日照井采女佐藤原吉政と周たり

文化七年の秋北畠^{ハシ}八幡宮詣^{ヨリ}御前の松書付る菅江真澄

流^ハる^ハ時^ハに事^ハなり秋の葉^ハの^ハおはせ^ハつる^ハの山

○太神宮末社^{ミカミ}○西宮神^{ミヤ}○稻荷^{イナリ}社神田五石祭日

四月十六日○愛宕社^{ミタケ}共^ニ喜^ニ介^ニ山^ニと^ニふ^ニ処^ニに^ニ奉^ニる

右 神主 照井主税 藤原吉雄

照井家累代並来由如左

天正年中

津野

慶長年中平七綱次

○照井氏上祖宮太夫○二代勘太夫○三代若狭守

○四代伯耆守吉豊○五代采女吉政○六代宮内佐吉治

○七代上総吉道○當時八代主税吉雄

○七代上総吉道俳名夏吹の句子○慶長や崎^ハル^ハせ

梅^ハり^ハ那^ハ○涼^ハ風^ハより^ハり^ハ盈^ハし^ハち^ハ蓮^ハの^ハ露^ハ○置^ハわ^ハぬ^ハす^ハ露

い^ハろ^ハや^ハ昔^ハの^ハ花^ハ 朝^ハり^ハ 月^ハの^ハ光^ハの^ハ夜^ハの^ハ室^ハの^ハ最^ハ上^ハ

羽長坊の門才

○照井家由来

○小野寺家系譜内藤原公光寛弘年中と云ふ

経範佐伯祖之此後胤陸奥^{ミヤギ}斯波^{スハ}郡^ノ今^ハ斯波神と云ふ

寺^ハより^ハ養子^ハせ^ハる^ハを^ハ照井平七綱次と云ふ中頃母

方家苗をつぎて高橋と云ふの曾祖父采女佐吉政の代より

た^ハび^ハ照井氏と改^ハめ^ハつ^ハる^ハより^ハた^ハと^ハ舊^ハに^ハ佐伯の家^ハに

○安久野社^{ヤスノ}あ^ハく^ハ野^ハハ^ハ本^ハ郷^ハの^ハ南^ハ御^ハ膳^ハり^ハの^ハ古^ハ川^ハ、^ハ遠^ハの^ハ山^ハ岸^ハに

存^ハ近^ハき^ハ世^ハの^ハ事^ハ々^ハ波^ハ知^ハ蛇^ハと^ハ尾^ハの^ハ切^ハれ^ハた^ハ大^ハ水^ハ蛇^ハ此^ハ古^ハの^ハ蛟^ハ

す^ハみ^ハて^ハ人^ハを^ハ水^ハ底^ハに^ハ引^ハ入^ハて^ハう^ハし^ハあ^ハる^ハ事^ハ々^ハと^ハあ^ハる^ハ蛟^ハ

續日本紀三十四卷
天宗高詔天皇^{四十九}
仁壽^三と宝龜^八年十
二月辛卯初陸奥
鎮守府將軍紀
朝臣廣^三言^三志^三波
村賊蟻結肆毒出
羽國軍與之相戰
敗退^ハ於是^ハ以^ハ述^ハ江^ハ介
從五位上佐伯^三和^三久^三
良磨^三令^三鎮^三出^三羽^三國^三
至是正五位下勳五
等云々と見えたり

ミヅハ
を罔象と奉奉りて訖津の社とて祭日七月朔日神主
照井氏

○叙花山正八幡と寛永六年の始大木村の郷十日町郷
西村の本居、社に祭日四月朔日八月十五日前ふつばらふ
記しるをよみて此をよめるのせし

○太神宮天和三年のもとのそのむり古鏡を田の
中より掘り出でて此鏡を建て太神宮と祭るもいづ其稻
田を鏡田といひてなほある○愛宕社元禄四年の
はらの○下居社鹿島大明神長暦二年のもとの○三
川後神社おき水上社も申は長暦三年のもとの此
所神の使者を蛙とてふ此所の方より暮を並て
此企とその神の手洗を暮使者川といふ今と照井家

のこまりの小川をびつちや川といふ此あり角間川
給人金子氏の記銀子武者一人追いつめらば馬をびつ
ちや川よりち入れんす登あり逃いあんとするを一うちお
せしと名のぬい誰しもあぬ夜軍残念あるもの記し
たりと見えたり

おなまうてや ちやんちやん
この日十ちのやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん
ちのやんちやんちやんちやん

其三

おなまうてや

ちのやんちやん

おなまうてや

三つとやにまゝの
 かつちりちりち
 のと ちちちちち
 ちちちちち
 ちちちちち
 ちちちちち

ちちちちちちち

舊牛王寶印ノ寫
 虫人食ノ年号
 見えが

照井氏家藏

黒太昌

18

賢德寺

古流山賢德寺ハ大谷東本願寺派之郷氏西寺也

開基釋采恩坊元德天文九年庚子九月十九日遷化寂壽九十三歳

本山八世蓮如上人越前国吉崎人俗姓さたらちん之弟子也

申為佛法弘通當國之下向大木林村一字建三

自古流山元德寺イフと号傳來の寶物左に記す

六字名號 一軸 蓮如上人真筆

蓮如上人七十歳壽像即自画之

御擬之御文 蓮如上人筆

婆粉紙經 武藏坊辨慶筆

聖德太子木像 作者未詳

己上

○二世釋了堅 天文二十一年壬子年三月五日化七十七歲
實如上人本山ノ御代永正九年寺号元徳寺額上美処
上人思召有リテ賢徳寺ト御漆筆を以て御免寫花ノ有

賢徳寺

厚紙二枚折之

○三世釋西念 天正十五年丁亥七月十八日化五十五歲
詮如上人本山ノ御代開基法名額上美処御漆筆在通

法名釋衆恩

天文九年九月十九日釋詮如判

○四世釋覺順又了洲 文禄元年壬辰八月十六日化四十

七歲六郎真衆寺次男之 額如上人本山ノ御代天正年
中織田信長と合戦のとき軍功を依て画像御本
尊持領す御裏書寫たのこし

方便法身尊形

本願寺釋形如在判

○五世釋宗玄 慶長十二年打正月二十日化四十六歲

○六世釋玄西 元和元年乙卯三月朔日化二十五歲

○七世釋道喜 慶安二年乙丑三月二日化八十二歲

小野寺孫五郎輝光城大城家臣安藤因幡道喜

主人輝光慶長年中最上勢と戦ひ居城の後道喜

出家女子一人召具レ當寺七世と相續所持武器等傳

未竟得共次第終了たし當時有来云分た志良以

○無銘ノ刀一腰 茶碗 唐物一口

○正觀音頭カシ南蠻鏡 狸々毛髪 已上

○八世釋了珎又玄寶 延宝二年甲寅六月二日化

宣如上人本山ノ御代六郎画像御本尊御免御裡寫

方便法身尊形

本願寺宣如在判
賢徳寺額主款了珎

琢如上人本山即代木佛，即本尊即免即寫

釋琢如在判

○木佛尊像

承應三年甲午五月十九日
羽列仙北平鹿郡大森村
賢德寺 願主 親了說
寄進親尼妙正

○九世釋了說又大道寶永二年乙酉九月二十六日化六十歲

常如上人本山即代五尊即影即免即染筆寫

○親鸞聖人御影

大谷本願寺 親了說
延室五季丁巳仲夏下旬書之
羽列仙北平鹿郡大森村
賢德寺常住物也

願主 親了說

本願寺釋常如在判

○蓮如上人真影

延室五季丁巳五月二十五書之

羽列仙北平鹿郡大森村賢德寺常住物也

○聖德太子御影

御裏之寫 朱印願主 親了說

○三朝七高僧御影佛裡寫如在

朱印願主 親了說

○寺內塔中寺号即免即印書寫如在 即判

依其方望木佛即尊像并寺号養傳寺被成
佛免美難有被好了意了仍少願即了者也

天和三載癸二月二十九日

八木采女判
七里道專判

賢德寺下羽列平鹿郡大森村 養傳寺法圓

○十世釋了因又團了享保十二年丁未正月是六十九歲

のらふつちのちといやぐりり

○傳福寺

○大森山傳福寺東六條下開基釋淨玄元龜三年
壬申六月二十三日遷化法苑顯上人師筆之此寺慶長
五年の頃まで六條の在処中野邊に在りしが同年の夏三
代目ノ兼念の時世

○阿弥陀如來祖師親齋聖人ノ師真筆

○師文 亮通 證如上人筆

○八世當住

了善

○大慈寺

○龍洲山大慈寺最上の安養寺ノ末山能登諸嶽
山總持寺の孫末寺として住僧二十年一度總持寺

の輪住職の寺こそなり 此佛刹の基ハ長和二癸丑年
後一條院の師代久我大納言六代の三男安貝方朝臣の
建之此佛の方等を大慈寺 肥後國同江府諸宗伽藍記云
大慈寺同山禪師名義尹号寒
巖顯徳帝第三子也出家登三白山學三
心三觀之旨捨之参永平道元云々 殿秋山月船大禪定門
長久三年壬午秋八月二十八日卒かくて康平保元平治
元暦文治至徳嘉慶應永の始まで三百餘年國々の
乱る草庵の如く有り無くの佛告ありしが山石左
鄰門の末孫照瑞公と出家して無寂禪師 無寂實峰ノ子実
峰山禪師ノ子
子とての弟子とあり舟洲玄鑑和尚と此尊師を中興の
祖とせり應永二年乙亥三月二十日遷化當時二十四世現住
功運和尚龍洲山の額面山和尚書之此寺創と今
宿子ありしとや出羽秋田六郡順礼記に平鹿郡大森村

○太平山寶藏院の開基は常陸國人の水戸兄弟
うち連て出羽國平鹿郡より兄を新羅と心にけ
て土民を庇ひ弟は修験道をよみて文田山といふ所を志し
し行いかゝて後巨海寺の跡を鎮座庚申社を守
護せり開祖寶藏院有元真壁家の次男を真壁掃
部介某といひておゑよしある人なり其事せしむるやま
世をさしはらからるやたらなるに佛遷邦の後別當
すちあり事申上らばそのつとを社より別當職にめ
るあち給ひて退轉及びを寶藏院おぼけの歟をば申
さるるに依りて再建せり七社の末社おせり家譜古記
録に有つてを明和中田禄といふ石斗のゆゑに傳ふに
たゞ口傳へし聞つるゆゑにあらう文田山の開祖の行い

跡のいふとなく残りぬといふ○二世清嚴院有清法印
延享三年丙寅七月二十五日遷化○三世大衆院有山
明和三年丙戌五月二十六日化○四世大衆院有當寛
政十二年庚申七月二十九日化○五世大衆院有慶文化
七年庚午九月九日化○六世當住大森寺有光之目
羅大徳諸巡見の時此地を志し止りおりに巨海寺を
建立ありその古寺もいふにたゞ後吾り祖太平山の
社庶一夜なり正しく夢のみさうあるを庚申堂
を守護し奉る之山神社を守護し奉るといふに
牛が沢村の市右衛門といふ民の山陰にいつく古き山
神の社ありしが所田の佐々木次左衛門といふ人御東
殿の田地新羅成就のゆゑの本郷村に十二柳と云ふ

あり是さちちのふ十二山神を祭るよりなごころ
とて元和三年癸亥ノ八月十二日牛ヶ沢山より遷し
ありしより守護し奉る所社といふ

○真澄考み此本郷は今の大本林の枝郷なるといふ
一いふといふ大なる里とおもふなり今もその西小跡
東小跡あるといふなりおのづかにもありやう本郷と
本ト國府といふ文字を書あやまり傳ふものゝ一
國府といふハ此地をいふ倭名抄に國府在平鹿
郡といふなり○大本林の肆のなハ八日所五日所横所
大所^{タラシ}市日二五八より大所ハ二日十二日二十
二日五日所ハ五日之横所ハ十五日二十五日八日所ハ八日
十八日二十八日くさて此大本林よりおのづかひて十日所村

近隣ありしと小野寺孫五郎康道の時世の麓
所とて十日二十日三十日おのづかひて肆日ありと十日所の名お
のづかひてありしとつねなり

今度作內務卿全
祿叛以多勢改威
至午時所與取之
後向之門遠推步
於東塾之城以圖
阮及新儀之不與村

此等文字與前卷同其意亦無異也

知方耐五粉骨之効
堅固耐難
之百早還由後及
之世勢作之由改
首主之由年す由家
其之之由義大廣之深

之由之由之由

天正二年甲申
羽柴筑前守

九月十九日
永吉判

羽柴筑前守

ツルギガハナ
〇 釵箇岬の古城由来

戦録より小野寺五郎康道義道の大谷吉継と戦い
最上義光上杉両家の兵三千騎由利十二黨ル一手とな
りし大いしくなり云々を見えやういふふみふ仙北六
郎の長五郎正乗マヤリ西陣より入れて和睦を成すの
大森万五郎を秋田城介實季の養子とす大江廣治
次男仙鶴磨を實季へ人質といたすいふこと見ゆこと
ありしことしあ事より大森万五郎といふかゆゑあつた
りやう永慶軍記三十三巻慶長五年大森合戦事と
なり清水大輔義之十月十三日酒田を打立同十六日大森と
着る事此事由利の人々軍打を以て秋田を告ぐる城介実季
の陣代として湊二郎五郎同久五郎同典膳百餘騎を

率し加勢して大旗を馳着せり由利當り仁加保兵庫頭
の嫡子藏人隼沢形部少輔同又五郎赤尾津孫二郎舍
弟九郎岩谷右兵衛尉同播磨守打越左近二百餘騎
着る最上勢を併て一万餘人同十七日に大森を揮き
圍を作り弓鉄砲を射け攻めり城主五郎康道三方人
数を配り防ぎたるが大手の持に堅あり齋藤相摸鉄砲
中より死す此口より破れぬれば秋田勢の内石郷岡七郎同和助
飼湯井弥七郎板垣久内真先に進め攻めり大森勢十
餘人討れて既所構を乱入る康道此由を見るより安か
らぬ思ひしに馬の腹帯を縮め大長刀をういひて棄て
ぬば福正院例の白装束を着し是れ長刀を持つてついでに大
手の攻めを見渡せば先駆の兵五百餘人此城の中を落し

推入と屏より着堀を潰り喚び叫び突入大森勢は爰を破
れて此城持事成りがたしと追出せば入遣つて余を
際の時合ありかゝるや城の大將康道次子福正院推参
ちる奴等と大勢をわけ合せ先に進みし者共を七八人倒せば
生死をばの最上勢は日未の手并を覺つし故叶いと
やおもひし外曲輪より引退く其見れ黄昏より傾くれば今日
軍は相止めざるに最上秋田由利の勢を併て大森林の手合し
味方大勢を討てしに合度城中小勢しか見えぬれば
侮りみくや思ひし面を對し陣を取て整へたり同日
の暮つかり秋田由利の後勢馳せ加へ三万人野山に陣を張
りて城中の者共更行修り守り手の陣を見渡し南に
つゞきたる高嶺と同林麓の谷を東に河の向まで焚續た

る篝火晴天の星の如く夥しと見限りあし寄手の方より此
勢より大森を拒む事隻手の中より有と皆偏執の思いをた
せ城の中より思いの外無勢を今日の所搦を打破る勢島
の地を意に淵奥の水を求むる様も打柄を告弟吉田孫
一郎陣道が郎等百餘人率し大森の北ある川の瀬より
渡り劔が鼻を歴廻り城中より事九バ同告弟義道が
郎黨より石崎伊豆前郷内池沼合た馬介大築地又二
郎庄司勝三郎日野小左衛門三百餘人より大森を意
い入る城中是より力を得て持口より人数を増し翌日の合
戦をぞ待みたる云々と見えあしおもしろし書の山北吉田
合戦のうだより同二十一日清水大藏大輔義之由利秋
田の人々より合戦の異見を伺はる其評定區より不定

爰より六郷兵部少輔が郎等大曲越中行屋門目五郎
等主の六郷の関守より卷陣すれば留守居より六郷より
止りたる最上殿より山北攻めの人高打入ると聞て領内
の士民より相催して千五百人加勢と稱し馳着し清水
水殿の臣木戸周防を以て申宣はる此城の地の利金き山城を
へ如何に守り手大難かりと見一日二日より落城仕へしと見
が其上横手吉田より加勢打入る西馬音内より武士頭
二人より長柄鉄砲足輕夜叉鬼山の方より城中より入ると風聞
より附は此城をハ今の御人数の内一力を以て卷ちしと見
る人数を以て吉田被攻めし平城の事よりあ一日の中より落
城仕りしと見申はる清水是を聞てげめや六郷の者ど
り此追逃り事あるハ兼て安内知ぬと見是等先手より

加へ吉田を攻落さんとして大森の城攻を圖り延澤遠江守光
 信も大将として秋田由利六郎の勢を相交へ三千餘人を
 五段に備へ押寄るに最上勢三千餘と山北勢千五百と
 二時をり戦ひが雙方戦ひ疲れて相引くを引取り
 最上勢は大森に飯陣すれば山北勢は吉田橋手黒川の
 三処へを飯りたりと見えたり真澄按る舎弟吉田孫
 一郎陣通が郎等百餘人を率へ大森の北なる川の
 瀬を渡り飯を鼻を壓甲城の中へ来と見えたり大森の
 北なる河とを御膳川の古川とて廣長五郎のこころに今
 宿のあきりまで地つらきやあきり軍人の往来川
 となりしより見へさうなり

甲 大森郷
 乙 古城山
 丙 十兵衛堰御膳川の古川と
 丁 菅生田村より御膳川の古川と
 戊 上溝邑



慶長ころまでと山川のまゝに
 甲市膳川に大森村あり流れたる
 うしを以て永慶軍記に北の川
 を流るゝと記すをながく古田の
 乙城中に入来し事見たり
 丙十日所村ありと村とて呼ば
 丁釵々泉村戊菅生田村
 己八沢木師の山々村々
 辛今ノ大森ノ町屋
 壬大森の峠町
 癸大森の本郷村
 庚今ノ市膳川の流
 乾 岩洞今ノ古川
 田の邊りなり
 坤八沢木の山沢より流
 流るゝをながくし前
 子を曲るゝしなり



大森林郷田地字所

東ハ中島西ハ堂林横枕瀬野金屋菅生田
 島回り清水上碓氷小深田小勝田奈田
 樋渡深見螺沼町田中田南ハ峠町頭
 梵天下河原上千刈下千刈赤沼鯨沼十二柳
 十二柳下長助巻牛ヶ沢小瀧下高野
 北ハ西野沢田佐戸水沢堤山下鏡田高口
 下山根文天山下

大森林八景

釵花山秋月 大慈寺晚鐘 水門夜雨 柴橋晴嵐
 鏡田落雁 真山暮雪 本郷帰帆 天下橋夕照

五社稻荷

○紫明神北稻荷峠町峠町ハハナリ城山の峠との九郎左
御門の家の後にもまゝ子斎ふむらゝ遠之膳隼人といふ
家より別て遠之膳氏なり

○正一位稻荷大明神同所山下太郎右衛門斎○正一
位稻荷大明神大所近江屋吉太郎 正一位稻荷大明神
五日所高橋忠七斎 稻荷古社大所大森寺斎

上田氏一事

○上田太兵衛大所子存近江国より上祖こゝまゐりし
とて家号もあやこやふゆゑもある屋戸よりと久
しと里長あり此家藏子清原の雪信カケかゝる四子カケの花
鳥水魚の屏風よりあり名こそそを記さねす

○女の筆をまゐるふれたるまた探幽斎守信一軸雨後
の不二見ふやうのやう中表ハ角龍の坊よりこゝみお赤
穂没落の時世のものゝて浅野家の調度をもてを人
語つてふ此上田より家の後子田象祠ありそのゆゑよ
文化の未のとき蚊龍象の女ミツヲロキつゝぬ此ものけの女ミツヲロキ
くちやうゝ已に水蛇ミツヲロキを神と斎いたふまゝ長く家の
守護神とあへんといふ水蛇ミツヲロキを神社を建てぬあるもの
けい去りぬといふやう菅生田山子鏡社ありそハ太神宮
の古社地子田より振り出し鏡を此上田氏ミツヲロキが斎といふ

十日所村一師由来
 角間川の一よりあ
 り 飯花山の八幡宮
 祭日ちねバ大堰橋
 あくして此邑より登
 つたれり一へのあ
 りんとす



叙箇岬之回

甲 八幡宮 乙 鐘樓 丙 神樂殿

丁 鹿島 社下居 社より実へ地

主ノ神ニ

凡小野寺遠江守康道の古城

跡ニ

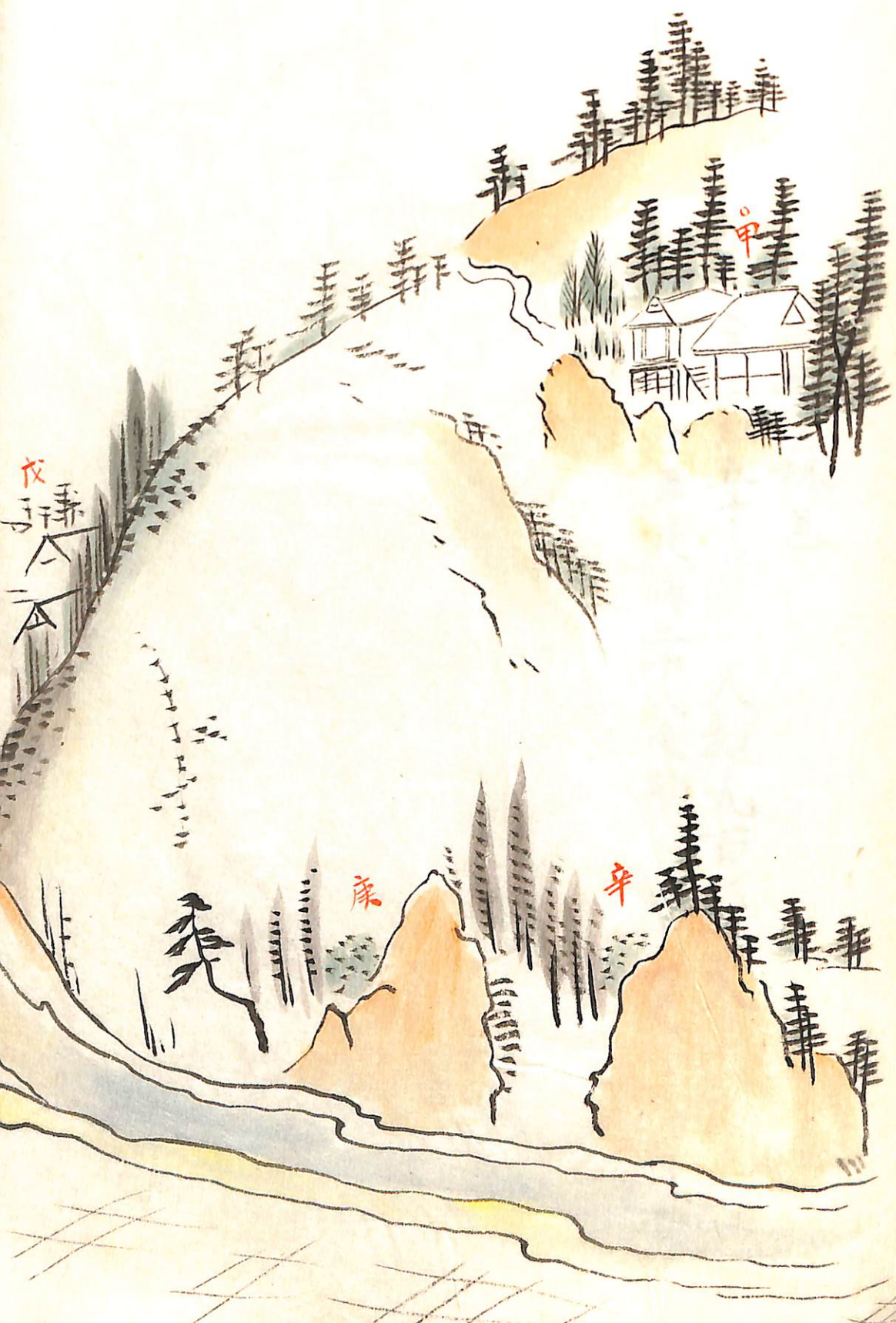
戊 龍淵山大慈寺

己 山石園の跡田とくちりとも

庚 大慈寺古蹟

辛 役人館の跡

壬 叙々鼻村今ハ百町ノ入りぬ



○大木林邑

○家員二百五十戶
○人數九百六十六人
○馬七十五匹內二十八匹駒 四十七匹

山毛左田見えたり猿田訛り左田と記し山毛ハ山矢の紙
蝕し山矢と見えたり印本せしものある山矢山谷山也
おもしろ見え今ハ山屋と作れ猿田山屋と並べたりこれ北山
よりあつちのちから思出のちの記し由あり秋田郡五十

○猿田村

里長 萬右衛門

○郡邑記云、家負大軒昔猿田地有由村なり中村と

いふ附礼右村の内前見理仙北郎外小友村水蔵あり左澤高

村指吾小友村合入サレヘキ哉云々見えたりお猿の元始し事

と云ふ雄勝郎の猿半内村ハ猿猴同始なりなること

物を始るもの新説をあること不便あり信濃国水内郡

の曲橋を端出の橋といふ歌子来目注の橋といふ詩家子

白猿橋と作り又猿田と今の山本郎子たりこそ東鑑ハ

山毛左田見えたり猿田訛り左田と記し山毛ハ山矢の紙

蝕し山矢と見えたり印本せしものある山矢山谷山也

おもしろ見え今ハ山屋と作れ猿田山屋と並べたりこれ北山

よりあつちのちから思出のちの記し由あり秋田郡五十

よりあつちのちから思出のちの記し由あり秋田郡五十

八位山御神きたがらりて猿田彦天八達之
 御脚神みて天孫當到筑紫日向高千穂穗觸之峰吾
 應到任勢之狭長田五十鈴川上因曰矣顯吾者汝也可
 送吾而致之矣天鈿女余還報天孫降臨果皆如期天
 鈿女余隨乞侍送焉云々見えたりといふ一はとらへ
 未だの御神々多のしとみお退轉その舊社地を知らず
 あきらかにことろを考ふ薄井村の舟沼に座す天王明神と
 名をすいらちる御神をやをを白井殿の鎮守の御神お
 りしといふその猿田彦宮末社にて鈿女余をいふ
 井殿の鎮守といふおの白井明神といふ天王明神をあま
 すい託傳おありといふことと恐れ多くいふおありといふ
 といふ井の村あり鈿女の神をいふ始なるを

別當千手院

開社千手院千手坊衆永法印寛文中化二世千手
院宥光三世玄光院宥順四世大光坊了圓五世甚正坊
宥元六世千手院慈照七世當住甚正坊衆光之神官
五八累代いくどく歴々へ明和元年乙酉三月十六日神事
の夜焼亡て別當の家財神益古記録にみえ灰^{はい}尽とありて
かゝるよしをいふに按^へて推名舒明^{オホナトキ}の御宇^{ミコサト}あるに百
濟国の日羅師とてきて来て国々を見めぐりおみ婆羅門僧
正の開基の寺々神託しあれはその時世ありといふ人あり
原越後国乙寺ハ婆羅門僧より建立之太平山^{オホナカ}巨海寺ハ
日羅師の建立といふなり一ハ大社ある社僧々房々多々
覺を並べ軒を連ねあり八千坊建繁衆衆て国々をめぐり人

いさるに群れはうてあぬ袴形といひがみのくさるる衣袴の付
る此邑の千手堂又猿田村の鉢信山八千坊行にありしころ
ある村々里々を統をあらわおれりしよりそのいたつてつ
る此邑のみふ白麻袴を着て春夏祭の祭はのほりし
す時久白袴衆といひ袴方といひいけ今に村々にな
れりしころ北八千坊にたて房舎の多き坊舎八千にありし事
阿ふさるやいふ坊舎の頭主佛刹あるといひ事ある三
千坊八千坊ある處あるといひなりしころの平泉の摩
多羅神の正月の夜祭を左少辨富任のずんざ有吉と訓みいふ
山と八千坊にたて坂におく六ヶ所といふなるあり
○下居社猿田大社二基といふなりむろの鉢信山
の大櫓とて大なる古木のつらに近れおぬ櫓水なる春と花

こととおれりしころありあさくらをといふありし此
峰に詣る人より首に注連縄をふり掛けたりとすよま
登りて其下向より寮のときかのまのききしを此櫓の枝
に懸ておる注連掛櫓といふなりとありしころ祭日本社
におあり社守佐々木方左衛門社祀神益古きものいふに
書寫のほけきやりしころ未だとも奉書寫法華經
一部家内子孫安全武運長久正徳六歲丙申七月十
八日藤原氏子吉長兵衛光直花押しと板井田村
の給人より寄附くといふ

○稻荷大明神社 祭日三月九日 社守太田羊左衛門
○水上

○此邑家三戸あり ○諏訪明神社 社守惣左衛門

式い古く神かみ

○山崎

北邑享保日記ニ家負四軒今ル四戸あり
白姫ノ社あり
りゆゑとしりて御神のとし祭日四月朔日之社守 太田嘉助

臘
土

此邑にありしとて、村にありし陽桶をみこせり
蠟土も作^{カテ}る蠟の始^{サハ}せし土をありしとて、
多^タづみし山本郡檜山の奥のつこきとて、
こゝに奴^{カキ}翁^{サトウ}一人是を知て人々を掘り来^キて蠟燭の土を
造りて、うち蠟燭の土を作る夜業^{ヨサ}に用たむとて、
得^ユる土をいふて、人々を誘^ユひて、
非^ヒたりといひ、さる土の地

此村に法興田寺と
小寺ありて小野寺
康道の臣安藤道
喜美夫藤城の後娘
をくゝて養田寺の
かゝしと大妻の賢徳
寺の託録に見えり
うつゝと養田の
轉々と云々

ありげしありといふあまのしるゑんと里くはつた末の家数尊
保日記に四云あり今も志らり○神明宮あせり今日三月十
六日社守清右衛門く

○
中
村

馬頭觀世音堂
祭日四月二十日
堂守高橋孫右衛門

○享保日記に家負九軒今十一戸に○稻荷大明神社祭日
四月九日社守太田忠五郎之○金神社金山彦、御神より
本地觀世音より四月十七日は祭せり痘疹エカサのねきことすべし
ろくろあふより童つねをおもるおふみ鍛カネ工トリものより一ツ天
目一箇メヒトツ余あじとやおましゆゝ々々社守伊左衛門に

智惠竹園澤

郡邑記と智井分沢と何り家貞五軒今六戸あり

人戯云り 智恵が沃いさる田子名だるやふくそと猿智恵
 のよしあり 智者千慮必有一失といつて是は醜名であらう
 ちんちん千枝の言やいせよ千枝の杉あり 信田の千枝楠あ
 りおの木を深くして千重く沃くやいひり 信濃の七いけ沃
 ありとて嫉り懐て風あたるとやあゝいり あたゝくち山陰
 の山賊らの男女集りて行末を契るとやあゝちいよ 知音
 を記さる 知音おの近付その国の女色の事をいつさる 信濃の
 田子名鳴ふ ちんちんちりつるたねむくらにふれるたねは良
 くぬきとてちんちんちるさる 記りよとてちんちんちるはちんち
 八幡宮御山獄山といふやうな屋敷みちの八幡とよをさ
 祭日三月十五日社守安部永四郎あり 此智恵が沃く杉けり
 いち 大なる皂莢の空木一本生たりむろ 此ふち安部喜

物衣廊門とふ家豊ある人あらしそが門の前み存りし木こまひ
 つくしごとま節搗とそ十月十日の家毎米搗精る例
 むれば家ごとまつあてさる業をぞせりける隣にもや梓音なり
 おもふもて起しあふ近隣も北白音をおどろき起し目な
 ば夜にまだ小夜中なりあうすつゝいつごととて雪ふみくまた
 き聞耳たつれば北皂莢の空木ウツボのもろきあしあやうきあり
 さらてあふことありのりやく音の聞えしるる何れも今
 いかるもござるあり大蛇ハ木の内よりみぬ邪もや奈ふもの
 などあふ小ね立端出縄皮ぬえあふしあふるや地藏堂より
 古に在地藏大士を安置す石峰定心とそ八十の偈すめり

野崎

享保日記家名四軒今北四ノ町野崎野坪を以て

いと多し、材木あり万葉集に東人の荷向篋をいふあり、
 ともろのりか地おろし、
 道祖神サハカミあり小松の下より小石を積みて塚を築くも、
 て陰形カゲガタを作り志を看る

○阿弥陀地

同日江家数七軒今五戸ありし、
 仏の形刻カタエたる石を掘り出さ今○阿弥
 陀堂を造りて安置スウ祭日四月十五日堂守安部五郎作○辨財
 天女祠六盆川の岸に斎イハヒる堂守佐々木久左衛門○専女社此
 社建つる由来ユキヨリは木林谷村の太事タシた四門ヨウモンが女十五歳イハヒのとき野崎
 の金六キンロクが家子嫁ヨメして来るといふ、木林谷の牝狐メキツネをたぐひ来て此



甲 大皂角子樹靈木
 乙 智恵ヶ沢
 丙 野崎

甲 智慧ヶ沢
乙 阿彌陀社
丙 畫川山
丁 畫川、白山宮



阿彌陀地村
甲 阿彌陀堂
乙 紫明神社
丙 安部五郎住家
丁 六孟村



甲乙 高二尺四寸半
丙丁 高一尺二寸半
戊 厚二寸半

記 正中乙卯
天年号の文
字見え頼源とふ
名あり
承應明歴のとし四の
中より拙り出しをうけ
その田を今あた田といふ



河内たぢ村の佐々木九郎その家の縁の下に窓を穿て
しこみて子産ぬあつた九郎四言云う汝をい子聞けそ
安永七年の暮りし夜宿り置つていそか福あつたといふ
家におゐたあつたといふあり 酬ふぬ奴も水や焚火をす
そくべしといふつゝ狐の去ぬかくて去つたの良あつた九郎は
娘律とて歳十五丁女狐魅とてなやといふ占とい
梓平とくれば吾は此家とまぬし狐の此地を出て今ハ栖
家迷ふと口をさるるさるれば阿氣村なる善明院をたの
て祈念避るゝあつた此年文政七年の秋ハ神と人畜いふ
りて此専女社にあつたといふ

鳥居

享保日記 家負五軒今七戸なりといふ 鉢位山の一神居

此地に在り二の鳥居ハ御社の溪に在りつゝ一の鳥居ありし
を以て鳥居村といふ所なり 山祇神社社守佐野本左衛門
門の家北より山を登り祭日八月十二日此邑より北よりて
水上の内に桃の木をいふやういふの 紫明
神といふ神鎮座に今に神社も退轉して木の石の
りてそのと知れり人もあしきりく木の中へ埋めて石
階の石をいふを残りし 此紫明神といふ御神
陸奥国宮城郡に在りて其地の人男女老幼いふまで身
に紫衣の衣けりあしきをいふて此禁制を犯めぬと崇禎
ふ御神といふ紫明神とやすふ花の衣のいふこと平親
王将門の靈をいふれば神と斎奉りて長能幣を採りて
江の豊神幣を手も持て祝をいふる紫明の神といふ日すハ

荒夫流といふやうにまた花の都に宮居をいふてこれを
考へ紫明神ハ平将門の神靈をいふやうに紫明の鎮座し
飯成御神をいふちのくの宮城郡に遷し奉りて名におふ
秋の錦の衣のいふやうにまた紫明の神といふをいふ奉るこ
ろに今此猿田御鳥居村の安藤久藏此荒廢奉りしを神
跡をたつね清めてさうやういふやうにまたいふ奉るこ
ろに常々白狐住のハ三狐事女の御神といふこといふ文政
八年乙酉初午日を以て紫明神といふやうに奉るこ
○稻荷明神社社守日社守紫田市之助といふにち村に
○紫明神社あり五郎作が斎る鳥居村の桃をいふやうに
いふ奉るこ

○北村、重郡、邑記、家、貧三軒、鉢位、山、佛、倍、米六盃、上、由、村、名、
と、見、元、年、今、三、戸、あり、○山王、社、田、中、に、まゐり、祭、日、四、月、中、
申、日、社、守、助、左、殿、門、之、

藥師如來堂四月八日堂守傳在門之

此邑所みたるの村々月夜のころ當歳馬のごときもの出ありと
あり白鹿^{ハク}ありとあるにさういふそれを知りてといふ人あり山獺^{ヤマノイヌ}
ふ白毛の獣あれどそのやいや増り大なりといふ

夏見澤

○郡邑記云、此村家名九軒北ハ仙北、郡外小友村内桑木代村權
山峰限と見えたり今十二ノ町あり夏見沃有ハ菜摘沃もふいづへ
あまの房中桑みしに菜摘をさふなりといふ

鉢位山古語

○鉢位山鰐口鐸銘、至徳二年六月十三日とあり、亘八寸餘、紫銅を以て鑄たり、是は百二代後小松院の市世至徳二年己丑の冬とあり、小野寺家系譜より小野寺玄喬、顯孫、即春光至徳三年、大島光晴一戦時、玉米郡劫取、應永十四年五月二十三日卒、五十八歳、墓所春光寺と見え、又小野寺孫太郎、彈正少弼、正應正安のころに在り、雄勝平鹿仙北三郡の庄主とあり、寄附の物多く、鰐口鐸とあるを寄せしものなり。

字地處

居長山 鳥居ありつるもの 鉢位山の一の
 手沃 むらり花坊の ありしうあり
 ひろ花 やゑあしゑふに書花と
 ふちのあり 花さくゆゑ
 懸造り

沢の芳野の掛作りのさゆき河あり坊中ありしふとい
 守り、沢とふ処ありおろしきやうなる渡ありて舟
 守住し処といふ、香爐橋あり、香爐木橋といふ
 ところありその橋いふくかりしとふ此橋の秋田郡
 寺内越後の相崎武藏その外よりありし聞し之をふ
 掛しハ三十間の長りありしと今と池といひて沼水のごと
 山道のかゝるありなり
 源田稲荷明神此御神鳥居村より源田吉と別が上
 祖の代より奉り奉りしが其御跡ふりてあらばあらねたる
 とふたひ奉り奉りていふ

稲荷棟札表

鳥居村と源田市之助が奉る稲荷明神の棟札臨書
 長々一尺八寸横六寸五分
 此棟札天正のころより傳ふこと狐の書つるよし一文字讀

牙 虎 新 能 齋 成 徳

徳二 師 衣 殿 巽 火 山

崩 改 功 神 細 神 齋 月 漢



棟札裡

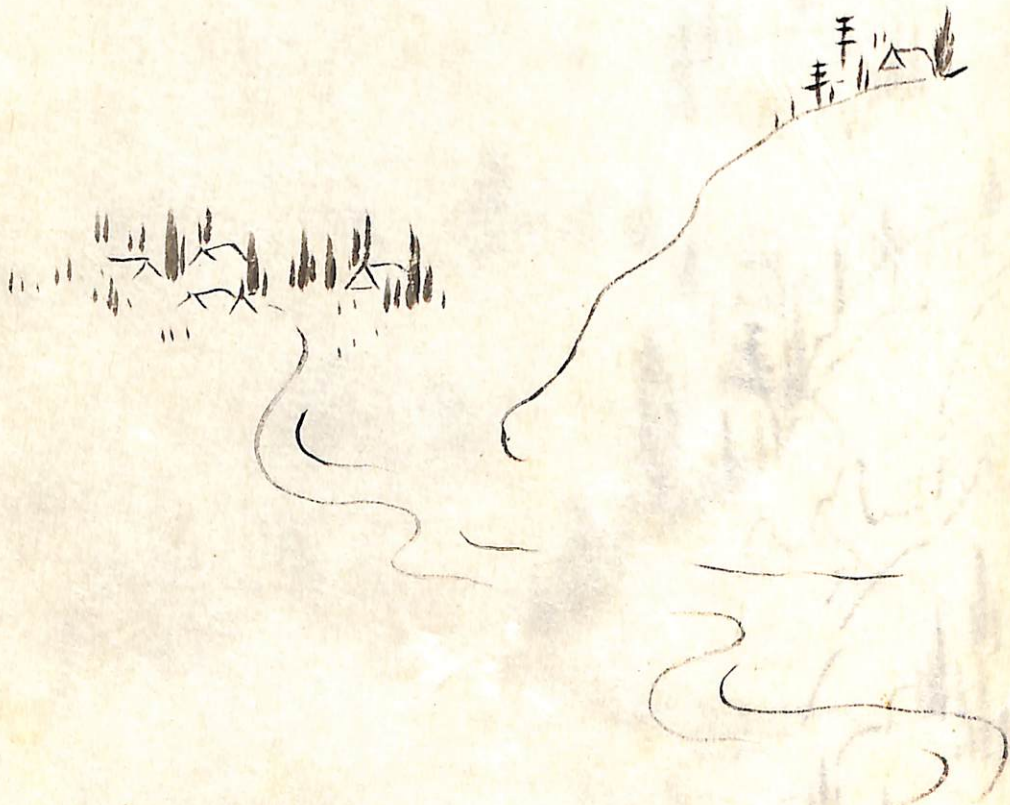
市川とて事起

そり蹴平

御所 狂歌

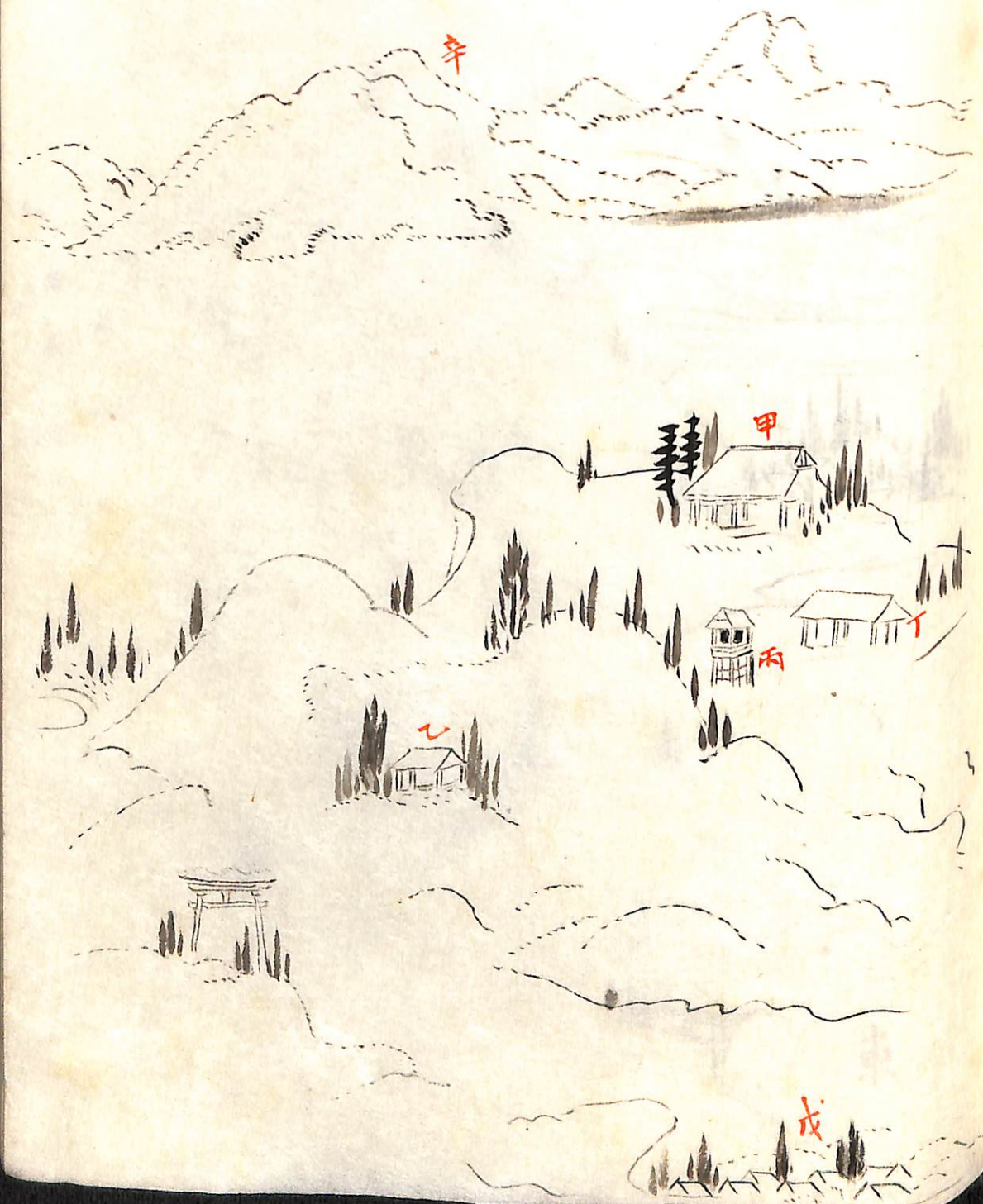
鮮事あゝぬれのとあや天狗の書といふものや
狐の書といふもの見るとありんか似たり

中村



鉢位山 八位山

甲本社向東南神璽々軒尊
乙正觀音、紫金山、佛形
乙下居社猿田彦、太神
大鐘樓、洪鐘
丙享保八年四月十八日
丁長床神樂殿をかねたる屋
戊鉢山邑ハ麓、御下居再
興々棟札子室永六年七月
八日
己守ヶ沢子水深くあう
香爐木橋とてか
庚御嶽塩湯彦、神ませり
辛貞書々山嶽



甲鉢位山より乙摩利支天山
丙橋岡山丁夏見沢と見たる



西



○猿田村

○家員 六十四戸

人数二百四十四人

○馬員 三十二足

○上溝村名泉

○岩清水櫻しづの泉あり此泉畫川の野中あり

○杉清水此泉畫川邑辻井のごとく人汲ぬ

○柳清水しづのうへふ村に存むりハハハ

水唐りり泉く

○檜清水中野の末に存いと大なる檜ノ木ありハハ

ハハハ

○櫻清水極楽寺村の田の中より存り此あたりの田字を
さくら清水と云ふ